書評 ラリッサ・ショ・ロムニッツ；マリソル・ペレス＝リサウル著『あるメキシコのエリート一族 1600～1980年 親族、階級および文化』

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>星野 妙子</td>
</tr>
<tr>
<td>権利</td>
<td>日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>アジア経済</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>118-123</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>1990-01</td>
</tr>
<tr>
<td>出版者</td>
<td>アジア経済研究所</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/2344/343">http://hdl.handle.net/2344/343</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
ラリッサ・A・ロムニッツ、マリソル・ペレス＝リサウル著
『あるメキシコのエリート一族 1820～1980年——親族、階級および文化——』

星野妙子

ラテンアメリカの低階層の要因をめぐってはさまざまな論点からの議論が存在するが、そのなかのひとつに、経済発展の担い手の問題、特に民族系の企業家やそれに寄与するものがある。そのような議論において描かれるラテンアメリカの企業家およびその企業の一般的な特徴としては、所有権と経営権の両方を一握りに保つ、一握りの強力な主導権の行使、視野の拡大を目的とした多様な経済活動の発展、革新的企業業界の高度化を推進する役割を果たすことを困難にし、彼らが政治的、経済的、文化的多様性を含む多様性を尊重し、力としての企業業界の発展を象徴するものとしても、彼らがそのような役割を果たすには、もちろん企業業界の発展をめぐる議論をも必要とし、しばしば主張されてきた。

それではなぜ民族系の企業家、企業家が、以上に述べたような特徴を有するのであろうか。従来の議論では、後に紹介するように、次のような要因から説明がなされてきたといえる。ひとつは企業発展の段階によるものとして、もうひとつは企業規模に対するものとして、そして第3は企業家の行動を規定する価値体系に由来するものとして、もちろん以上の要因は組み合わせてあるものではなく、議論の相違点はそれをより重視するかという点にある。本書の議論は第3番目に属するものである。以下においては、まず本書の内容を、編集構成に従いながら、特に企業家活動に関心をもって紹介し、次に従来の議論との比較検討を通じて、本書の積極的意義と限界について考察を行なわない。
の発展が、３代目から枝分かれした経済的・社会的特性を異とする5つの分枝（branch）について記されている。そして、一族の店舗の増加、彼らの経済的・社会的階層分化。住居地の拡張にもかかわらず、一族の結びが非常に坚硬であることが指摘され、結びを可能としているいくつかの要因があげられている。その主なものとして、バトンショウクライアント関係が一族のなかに形成されており、そのような関係を基盤として経済的な交流が行われ、そのための資源として一族の企業が重要な役割を果たしていること、一族のなかに雇い主や保護者として親族の間を見ることに指導的な男性が存在すること、一族の結びの要となるような女性が各分枝に数多く存在し、互いに連絡を取りあい、分節内、分節間の情報を取り集め、伝達する役割を果たしていること、イデオロギーや儀礼を通じてゴメス族独自の文化が保持されていること、等がある。

第3章ではゴメス一族の企業家活動の特徴が分析され、親族関係が企業家活動にどのような影響を与えてい るのか、さらに、その合理性および限界について考察がなされている。ゴメス一族の企業家活動の特徴としては次点が指摘されている。一族のほとんどたちは企業家として親族の関係で経済活動を開始し、その後独立して自己の事業を起こしている。その場合、これまでいた企業と何らかの関係を持つ事業である場合が多く、その結果、バトンショウクライアント関係を持つ一族の企業のネットワークが形成された。一族の側の企業においては経営者が1人の経営者に集中されており、その人物により家族的な企業支配が行われている。経営者が死亡した場合、その事業は息子たちに引き継がれた。ただし、経営権をめぐる衝突を回避するために、複数の後任者による事業の相続は個別企業単位で行われた。それであることによって、企業家の事態を複数の小規模企業に分散させる傾向があった。企業で働いていた親族の親族が独立して新たな事業を興すのは、このような会社化が少ない。一族の企業においては家族の生活活動と事業活動が明確に区別されており、家族内での事情が事業の決定を左右した。たとえば、投資に際して企業家が常に考慮に入れないのは、家族の生活様式を維持するのに十分な利潤であり、そのため経営で高利潤を計る投資が好まれた。企業家の資質としてもと同様に重要なのは、社会的なネットワークの開拓能力である。ネットワークの基盤となるのは親族関係であり、その上で形成された企業、情報のネットワークが一族の経済活動の展開を大きな役割を果たした。もうひとつの重要なネットワークは経済的資源と価値の影響力への接近のための親族外交のネットワークである。その開拓のために多くの費用と時間を費やされた。開拓の場として商工会議所、社交クラブ、慈善事業等が利用された。

以上の特徴から、ゴメス一族の企業家活動が親族関係と不可分に結び付いていることが明らかになった。そのこととする合理性は、以下のように整理できる。同族企業の合理性としては、企業の成長にあわせて管理ポストを自然なやり方で設けていくことができる。外部に対し一丸となって対応できる。経営を下した同じ人物が経済的リスクを負う、等をあげることができる。ただし、同族性は企業規模が一定の水準以上になると、足枷で制限する。それは、企業規模が拡大すると一元による統制が困難になる一方で、同族性が、競争の激化や政府の政策により重視される企業の内部組織の近代化を阻む要素となる。ゴメス族の例に見るようにもうひとつの同族関係の問題点は、世代交替のための新入社員が企業活動に参加される発端。その結果としての資本整備過程のほぼ30年ごとの中断である。組織による事業の分断はゴメス一族の近代的企業グループへの転換を困難にした。1960年以降、多国籍企業、政府系企業および、同族企業の制約を克服し近代化を果たすための新社員企業が発展を遂げた結果、メキシコ産業界におけるゴメス一族の独自的性質を低下し、現在では企業としては二流の位置を占めるにすぎない。

親族関係が企業家活動により積極的な意味を持つのは、社会的なネットワークの開拓と利用の面においてである。親族関係が3代の企業と情報のネットワークを拡張し、さらに、経済的資源、情報の影響力への接近のためのネットワークの開拓においても、一族の成員の交流関係が重要な役割を果たした。メキシコの企業家、さらにはメキシコ人一般にとって、社会関係は経済的資本に転化する可能性が存在する。ゴメス一族の企業家としての才能は、この「社会的」資本の実態である社会的ネットワークを、経済的資源の獲得のため、さらに経済的不安定期を乗り切るために、開拓、利用するその手腕に発揮されたとといえよう。

第4章ではゴメス一族の企業家活動を大きく規定してい る親族関係の特性について述べられている。ゴメス一族の結びの基礎的単位は3世帯大家族であり、一族の結びは、社会生活、儀礼、親族関係、イデオロギーの4つの領域で表現される。親族歴史の形成は情報、財、サー ビスの交換の頻度によるところが大きい。そして成員間の 物理的、血統的、親族的、年齢的、イデオロギー的
書評

距離が、交換の頻度を決定する要因となっている。また交換の場として、親族の儀礼は重要な意味をもつ。

社会のある特徴はその社会に特有の親族構造から説明することができる。個人主義の家族制度が成立する西欧社会と比較した場合、ギリシアとみられるような家族制度が成立する社会においては、個人は、特に人生の危機局面において、より大きな社会的支援を受けることができる。しかしこのことは同時に個人の自由を制限する。個人主義社会の場合、個人はそのような社会的保護願をもたない。そのために社会は個人を統制し保護するものとして、法律や制限を用意されざるをえない。3世代大家族を基礎的単位とするような親族構造は他のラテンアメリカ諸国、そしておそらくスペインや他の地中海沿岸諸国に広範に見られるものである。個人より家族、個人の自由より集団の利益、個人の発展より家族を優先する価値体系を「地中海型コーポラティズム」と名付けることができる。ラテンアメリカでは3世代大家族の結びがさまざまな社会階層において確立できる。ただしこのあらゆる家族は階層によって異なり、たとえば都市貧困層の場合、家族の結び方は、苦難な環境におかれた彼らの生活を支える相互扶助のネットワークのなかに見え出ることができる。ギリシアの場合、家族の結びは儀礼、経済的相互行為において表現された。

第5章では、ギリシアに由来し、かつわたらさまに儀礼の特徴をもつ、それらが一様な社会の形成において果たす役割を検討している。ギリシアにとって儀礼の意味は、親族の内外の境界を決定、再定義する機会であり、親族内の幅、家族、部族、商人、経済的地位、ヒエリラリーに Tributeネットワークの内部序列化、分断を行なう機会であり、また、一種のイデオロギー、家族、個人の情帰が流れ、更新される場を提供し、さらに3世代大家族を基礎とする親族集団の存続の発現の場であった。これが単なる交友関係と異なるところは、儀礼化により恒常性と神聖性が与えられる点にある。

第6章では、ギリシアのイデオロギーの特徴について考察が行われている。ギリシアのイデオロギーには、メキシコ社会における宗教、階級、ナショナリズム、近代化等の分野の支配的なイデオロギーが黒幕に反映されている。ただしこれらがそのまま受け入れられていないことではなく、これらから様々な信条、価値が選択的に選ばれ、さらに一様の歴史的経験により再解釈が行われている。一国での成員のイデオロギーを個別に検討してみると、論点によっては個人間の微妙な意見の相反や食い違い、論理的な矛盾もある。しかしこのような見かけ上の非整合性も、一般に、家族の利益という根拠のうえに解釈できるものである。イデオロギーは集団の結束の道具として重要な役割を果たすが、必ずしも整合的である必要はなく、あらゆる問題について集団の利益の優位を可能にするような回答を提供するものであろうと十分である。イデオロギーは、想定されるすべての状況に対して、集団の成员が特定の対応をすることを可能にするような信条、価値の有機体であると理解できる。

以上の分析から引き出された著者らの結論を整理すると次のとおりだろう。

11第1に、資本主義における特徴とされる形態からかけ離れたギリシアの経済行動をどう理解するかについてである。著者らは、資本主義は特定の社会・文化システムの構成部分であり、その相手の行動は彼らの価値、伝統的な社会関係のシステムに大きく規定されるとして考えている。メキシコの場合、資本主義は、国家権力が脆弱で、資本構造が不十分な状況で導入された。そのため初期の企業家が、伝統的な社会関係のシステムないすも自らの存続と発展の条件を達成するための戦略を求めねばならなかった。その戦略は、家族を核とする社会的ネットワークを媒介する利用可能な資源の動員である。社会的ネットワークは経済的活動に不可欠な社会的資本とされ、その推進と拡大に企業家としての能力が発揮された。ただし家族の価値と家族を核とするネットワークに基礎を置く社会関係は常に資本構造に役立ったわけではない。それはたとえば企業家の死亡による資産の分散、家族経済的経営スタイルによって、企業の拡大と近代化の制約ともなった。しかし、近年の経済危機において示されているように、信用と戦略に基づく組織的企業は、その柔軟性ゆえに、不定命数のいきる力が続くかぎり有効な企業形態であるわけではないだろう。

2点は同族企業集団の内部組織についてである。同族企業集団は、親族のネットワークを基盤に組み立てた相互依存関係にある同族企業の複合体であり、家族全体により支配されて非公式のコンソーシアムといえる。ただし経営の中心、共通の政策や金融的パックグラウンドを持たないという点で、近代的企業グループとは異なる。

3点は親族システムの特徴についてである。メキシコの親族システムの基礎は、経済的、儀礼的、伝統的、社会的結束の基本的単位である3世代大家族であり、それを核に親族のネットワークが形成されている。メキシコではこのような親族システムを、歴史を通じ、あらゆる社会階級において見出すことができる。親族システムと経済戦
略の統合の形態は、階級、社会集団によってさまざまである。ゴム工業の場合は、階級システムを同業者単独体という形で経済戦略に組み合わせた事例といえる。

第4点はゴム工業と政府の関係についてである。政治権力を握る政治家・官僚と、資本を握る（ゴム工業もその一員である）ブルジョアジーは、半ば協力、半ば競争の複雑な関係を保ちながらメキシコの工業化を推し進めている。各々独自の歴史と生活のスタイルを持つが、互いの利益的利害の間には十分な対立があり、その結果生じた様々な個人的または集団的な関係が可能となっている。

第5点は階級と階級の関係についてである。階級の階層分化が続くと、成人間の経済的差異が生じ、階級的関係が増強されるようになる。しかし、階級の連絡のイデオロギーは階級意識より強固である。階層内の階層的関係を緩和させようとする、軍、警察、労働者間の関係が果たされている。しかし、軍、警察、労働者間の関係は血縁的、社会的、経済的距離が広がるにつれて弱まり、消減する傾向にある。その時に初めて、階層的関係が明らかになり階層の枠の認識が消滅するであろう。

本書は、階級システムという独自の視点から分析対象に追うことにより、従来の議論では十分説明できなかったメキシコの社会集団の特性について、ひとつの体系的な解釈を提供したといえる。ただし、この解釈によっては説明できないメキシコの社会集団の特性が存在することも事実である。そこで、従来の議論およびメキシコの社会集団の特性を踏まえながら、本書の積極的意義と限界について検討を加えてみたい。

本書が評価されるべき第1の点は、独自に見出した豊富な実証的データに基づき議論が行なわれていることである。最近、メキシコで階級構造家や研究者についての研究が数多く発生されているが、十分な資料の裏付けを持って議論を展開している研究は必ずしも多くない。また、新たな資料発見の努力はあまりされていないように見える。このような状況を考える時、一次資料発見の努力を怠らず、さらに、集められた資料を駆使して独自の議論を展開しあうとする著者の研究の姿勢は、高く評価されるべきである。

内容において本書の議論で評価できる第1の点は、従来の議論では資本家階層の観点から見れば非合理的と捉えられていたメキシコ系産業家のいくつかの行動について、その合理性を、独自の論理によって説明している点である。たとえば、従来、特に経済学者の議論においては、メキシコの農業層の「農業」性質は資本家階層の問題要因とみなされてきた。しかし、本書においては「社会的」資本という独自の概念を用いることにより、「農業」の合理化が説明されている。すなわち、この場合「社会的」資本とは具体的には人間ネットワークであるが、農業と見ることは、「たとえば雑種学生活様式や社会への適応を必要とする」人が人間ネットワークの開発と維持のための投資の意味を持つことが指摘されている。

本書の議論で評価できる第2の点は、著者らの議論によってメキシコの社会集団の現状にある側面が非常にうまく説明できることである。

例をあげれば、メキシコの社会集団では階級性が根強く残るが、また、階級性は今後も維持されるのか否かについて、ひとつの議論を与えてくれる。階級性は、従来の議論においては、たとえば、企業発展の初期段階において一般的に見られる形態として説明されていたが、G・R・A・リードは産業の発展期において階級性が積極的に役立つ、発展の過程で階級内では金融的資源を媒介資源に供給できるという段階が訪れ、その時に企業の近代化が始まるとし、この過程がメキシコの社会集団において実際に進んでいることを、産業都市モンテレイの同業者の役割を分析することでより明確にしようとした。
より独占、持株会社への─の─の持株の集中によりいまだ
に堅固な同族支配が維持されている。このような同族支配
への─は、本書で述べられている企業家の価値・規
範によって説明が可能である。

著者の─が現状を説明するうえで─的なものには
とる点は、彼らの主張する民系同族企業集団への親
族関係からの接近により、企業集団間の非公式なつなが
りを明らかにできるという点である。著者が想定する
のは、主に中小規模の同族企業間のつながりであるが、
このようなつながりは近代化を果たした大企業グループ
で見られるものである。たとえば、モンテレ・グル
ープは組織上、独立の4つの企業グループに分けられて
いる。それぞれの企業グループは、4つの3世系家族に
よりそれぞれ長年の主導権を握られている。しかし4つ
の大企業は血縁関係にあり、親族間で直接の相互の持
合い、親族間の相互派遣が行なわれている。親族関係から接
近することによって4つの企業グループを含むさらに大
きな企業グループの存在を明らかにすることができる。

ところで、本書の議論が注目される一つの点は、企
業家、価値体系と資本蓄積の関係について、従来の議論
とは異なる見解を提示している点である。企業家の価
値体系については、従来、社会学者によって議論がなさ
れてきた。それらの議論で共通するのは、ラテンアメリカ
の伝統的価値体系と資本蓄積の関係を対立的に捉える
点である。たとえばメキシコの企業家についての研究を
行なったF・ドリッシュは、伝統的な価値が経済的
の発展に否定的な影響を及ぼす者が存在することを指摘す
る(注1)。またラテンアメリカの産業革命の価値体系
について研究したS・リッピュセットは、ラテンアメリカ
の経済発展のための経済的前提条件を欠くうえに、資
本蓄積が押しとどめるような行動を強制する価値が保
持されているためである、との見方は(注2)。両者に
共通するのは、企業家はそのような伝統的価値から相対
的に自由であると想定している点である。これに対して
ロミュックとペレス・ソサウルは企業家の行動も伝統的
価値に規定されていることを指摘している。これに対し
てロミュックとペレス・ソサウルは企業家の行動も伝統的
価値に規定されていることを指摘している。これに対し
てこれらの価値体系は共に異なったものであるが、これ
は相対的に大きな違いがあるためである。もし同じく
この三者の価値体系は共に異なったものであるが、これ
の三者の価値体系は共に異なったものであるが、これ
の三者の価値体系は共に異なったものであるが、これ
の三者の価値体系は共に異なったものであるが、これ
の三者の価値体系は共に異なったものであるが、これ
の三者の価値体系は共に異なるものである。しかし、三者の価値体系
の共通点は、企業家はそのような伝統的価値から相対
的に自由であると想定している点である。これに対して
ロミュックとペレス・ソサウルは企業家の行動も伝統的
価値に規定されていることを指摘している。これに対し
てロミュックとペレス・ソサウルは企業家の行動も伝統的
価値に規定されていることを指摘している。これに対し
てロミュックとペレス・ソサウルは企業家の行動も伝統的
価値に規定されていることを指摘している。これに対し
てロミュックとペレス・ソサウルは企業家の行動も伝統的
価値に規定されているを
再編が行なわれていることを考えると、事業の近代化の要請と伝統的価値体系は、相克・せめぎあいの関係にあり、そのような関係のなかで、組織・経営のあり方が模索されていくと考えられるのではないだろうか。

本書は、文化人類学の観点からなされてきた著者たちの親族システムに関する研究の延長線上にあるものである。しかし、以上述べたように、企業家および企業研究の観点からみても、その示唆するところは重要であり、本書がこの分野の研究の発展に寄与するところは非常に大きいといえる。

（注1）Lomnitz, Larissa A., Como sobreviven los marginados, メキシコ, Siglo XXI, 1975年。

（注2）たとえば Aguilar, Alonso, "El proceso de acumulación de capital," A. Aguilar; P. Cormona, México: riqueza y miseria, メキシコ, Editorial Nuestro Tiempo, 1967年。


（注4）Evans, Peter, "The Latin American Entrepreneur: Style, Scale, and Rationality," S. M. Davis; L.W. Goodman 編, Workers and Managers in Latin America, レキシントン, D.C. Heath, 1972年。

（注5）Derossi, Flavia, El empresario Mexicano, メキシコ, IIS, UNAM, 1977年, 12〜13ページ。


（注8）指編「メキシコの家族系大企業グループ」(1) (2)(3)《アジア経済》第29巻第9,10号 1988年9,10月。

（アジア経済研究所地域研究部）